

日本ウィニコット協会 Newsletter

Vol.11 2023

目次

ウィニコット・フォーラム 2023 「「外傷」について考える」	1
翻訳者に聞く	4
「『成熟過程と促進的環境—情緒発達理論の研究』について」 (大矢 泰士)	4
「独立派はウィニコットだけじゃないぞ」 (筒井 亮太)	4
「ウィニコット研究」投稿募集.....	13
協会からのお知らせ.....	16
編集後記.....	18

ウニコット・フォーラム 2023

「外傷」について考える

ウニコット・フォーラム 2023 は、2023年11月23日（祝）にオンライン形式で開催します。ウニコットの業績は、その全期間を通じて外傷のテーマが見え隠れしています。さらにたどれば、彼自身が精神分析を求めたきっかけも戦争を体験したこともあるでしょう。今年はテーマを外傷としてシンポジウム、講演を企画しました。

一方で、私たちが精神分析を学ぶ上で、実践と並び「読むこと」が大事であることは言うまでもありません。一人で、グループで、何度も私たちは先達と出会い、語り合います。特にウニコットはその文体の特徴からしても、いつ誰と読むかによって、理解は変わるようにも思います。午後は「ウニコットを読むこと」としてパネルを企画しました。

さまざまな年代、現場にいる方にとって刺激となる一日となることを願っております。概要の詳細については、下記をご覧ください。皆さまのご参加をお待ちしております。

大会委員長 加茂聡子

ウニコット・フォーラム 2023 事務局一同

記

日時：2023年11月23日（木・祝）10:00~17:00

会場：オンライン（定員200名）

参加資格：守秘義務のある専門家に限ります

参加費：会員 ¥5,000／非会員 ¥6,000／大学院生 ¥3,000

参加申込方法：以下の Google フォームからご登録ください。

<https://docs.google.com/forms/d/1PHb81jTp1JSdRxRfyvHo7e5PQw4MTiqarTBWUN-aUkg/edit>



申込締切：2023年11月13日（月）

お問い合わせ：ウニコット・フォーラム 2023 事務局

1600004 東京都新宿区四谷 1-8-14-1002 四谷こころのクリニック内

itsukikamo@gmail.com（加茂宛）

参加可能な方に受諾のご連絡と参加費の振込先をメールいたします。

※日本臨床心理士資格認定協会の定める資格更新ポイントを申請する予定です。

プログラム

10:00~10:05 開会のあいさつ

10:05~12:30 大会企画シンポジウム「「外傷」について考える」

シンポジスト

「「原初の情緒発達」と複雑トラウマ」奥寺 崇（クリニック奥寺）

「「壁」について語る」工藤 晋平（名古屋大学）

「探すことと見つけてもらうこと」永田 悠芽

（上町カウンセリングオフィス）

指定討論：鈴木 智美（精神分析キャビネ）

司会：加茂 聡子（四谷こころのクリニック）

12:30~12:45 総会

12:45~13:30 休憩

13:45~14:45 特別講演 「解離とトラウマに関してウニコットが提起したこと」

岡野 憲一郎（本郷の森診療所）

司会：加茂 聡子

14:45~15:00 休憩

15:00~17:00 パネルディスカッション「ウニコットを読む」

パネリスト

「聞き流すように読む」岡本 亜美（個人開業）

「心的成長の踊り場：ウニコットの青年期論を読む」筒井 亮太

（立命館大学）

「最後の三冊を読む：『子どもの治療相談』『ピグル』『遊ぶことと現実』」

妙木 浩之（東京国際大学）

指定討論：加茂 聡子

司会：吉村 聡（上智大学）

17:45~17:50 閉会のあいさつ 加茂 聡子

フォーラム参加に際しての留意点および遵守事項：必ずお読みください

今年度のウニコット・フォーラムは、オンラインで開催されます。

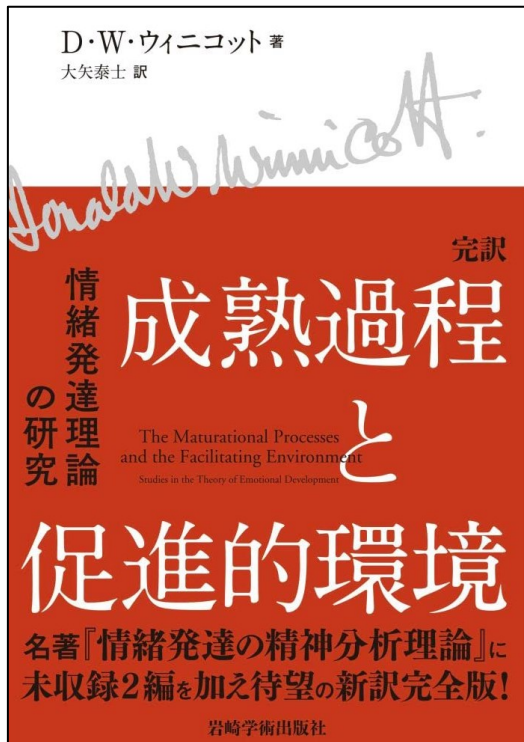
オンラインでご参加の皆様におかれましては、以下の事項についての順守をお願いいたします。同意いただけない場合には、参加を承認することができません。ご了承ください。

1. 参加資格は、守秘義務のある専門家に限定いたします。
2. 参加に際して得られた情報は厳重にお取り扱いください。SNS 等をはじめとするオンラインへの掲載および投稿は固く禁じます。
3. 開催 10 日ほど前に、参加者には配信を行う URL をメールで送信いたします。このメールを他者に転送することは厳禁です。
4. 個人での録画や録音は、スクリーンショットも含めて、すべて認められません。
5. フォーラム参加に際しては、プライバシーの確保できる環境でお願いいたします。参加者以外の方が画面を見たり、音声を聞いたりすることができない環境でご参加ください（カフェや図書館など他の人が偶然にでも画面を見たり、音声を聞いたりすることができる環境での参加は認められません）。
6. 無料 wi-fi などの通信を傍受できる可能性のあるネットワークからは参加しないでください。
7. オンライン実施のため、電波状況によっては中断などが生じる可能性があることをご了承ください。
8. 個人の受信環境により当日参加できなかった場合、返金は致しかねます。ご了承ください。
9. その他、プライバシーの問題に抵触する可能性のある言動等は、一切お控えください。

翻訳者に聞く

『成熟過程と促進的環境—情緒発達理論の研究』について

東京国際大学 大矢 泰士



岩崎学術出版社 HP

<http://www.iwasaki-ap.co.jp/book/b614764.html>

昨年(2022年)11月、ウイニコットの『成熟過程と促進的環境—情緒発達理論の研究』の新訳を岩崎学術出版社から上梓することができた。ご存じのように、この本には1977年に牛島定信先生が『情緒発達の精神分析理論』の題名で出された先駆的な訳業がある。以下では、旧訳の思い出にも少し触れつつ、この本に関連していくつかのことを記したい。

まず、最初の部分では、この文章を書く機会を頂いたときに本協会のマネジメントに携わる先生方から書いてほしいと言われた、新訳出版の経緯について簡単に記したい。「経緯」として、もっと人間的なドラマを思い描いて要望されたのではないかと想像するのだが、実際のところは散文的な話なので、いま振り返れば、私自身が日本のウイニコット受容の歴史の本流にいたわけではないことからくる「無慈悲さ」(ウイニコットの言葉を借りれば)ゆえに成立した新訳なのかもしれないと思う。その文脈で言うと、

もしこれが無慈悲な「破壊」であったとすれば、それに対して日本のウイニコット受容の流れが「生き残って」くれることを願うばかりである。

次に、後半の部分では、この本そのものについて記したい。この新訳の本の巻末解説を書いたときには、あまり長い解説でページ数を増やしてしまって本の値段が上がるのは避けたいのと、その本に書いてあることを巻末で繰り返してもしようがないという思いもあり、全部で23もある各章の内容紹介は基本的におこなわず、むしろ本全体やこの時期のウイニコットに関する解説にとどめることになった。ただ、そういう各章の内容紹介はどこかに多少あっても良いだろうと思うので、この場を借りて、あえて他所では比較的上げられる機会の少ないであろう章を中心に、内容のごく一部を紹介したい。この本のなかでも、代表的な章の解説については、館直彦先生の『ウイニコットを学ぶ』をはじめとする成書を参照していただくと良いと思う。

1. 新訳出版の経緯

まずは私事から始めることを許していただきたいが、1980年代の後半、大学院時代に精神分析の観点に惹かれながらも当時主流だった自我心理学理論がどこか機械論的に感じられて（今から思えば私自身の不勉強のせいもあるのだが）親近感をもてなかった頃に、しっくりきたのがウニコットのこの本と『遊ぶことと現実』の二冊であった。とくに牛島先生の訳は、自然な語り口で親しみがもてると感じていた記憶がある。ただ、当時、いくら読んでも意味が分からない箇所が幾つかあって、ウニコットというのは何と難解なことを言う人なのだろうと思い、降参するとともに少し敬遠する気持ちになったのを覚えている。原書も注文したが、インターネットが普及するより少し前のことで、取次店に頼んでから実際に届くまで非常に時間がかかり、頼んだことさえ忘れた頃に届いたのだった。その後、当時、藤山直樹先生が主宰されていた継続的なセミナーでウニコットをじっくりと読む機会を得たのは幸いだった。

年月は流れ、トマス・オグデンの翻訳をいくつか出した後に、編集者を通じて橋本雅雄先生から声をかけていただいて『こどもの治療相談（旧題）』と『遊ぶことと現実』の改訳に取り組んだ。この二冊が出版にいたった後、何人かの先生方から異口同音に、『情緒発達の精神分析理論』のほうは改訳を出さないのか、そっちのほうが必要が高いのでは、という反応がかえってきた。このときに思い出したのは、『遊ぶことと現実』の改訳の準備で『情緒発達の精神分析理論』の本に目を通していたとき、以前いくら読んでも意味が分からなかった幾つかの箇所にもまた出くわして、ふと原書をあたってみたところ、どれも難解なところなどなくて拍子抜けしたという経験だった。その翻訳がなされたのはウニコットが亡くなってそう何年も経ってはいない頃で、まだウニコットを日本に紹介しはじめる段階のことで完璧な訳は求めようもないし、もしその段階で自分がやっていたらどれほど苦労したかを想像すると到底批判などする気にはなれないのだが（そして誰であれ翻訳ではどこかでミスをする可能性が排除しきれないので尚更である）、たしかに、それから約50年を経て改訳をすれば、以前の私のように降参して敬遠する人が減るのかもしれない、そのとき品切れ状態だったこの本を新しくする意味はあるのではないかと思った。編集者に連絡し、伝え聞いたところでは、牛島先生にとっては愛着のある訳業であったにもかかわらず、後進が取り組むことをご海容くださった。このとき、先生は旧訳のさいに九州弁の口調をイメージして訳されていたと伝え聞いて、それがかつて私の感じたあの語り口の自然さにつながっていたのだなと納得したのだった。

とはいえ、今回の新訳では、日本語的に噛み砕いて伝えることよりも、むしろウニコット自身の言葉遣いや言い回しをなるべく生かすようにした。そのほうが、ウニコット受容が進んだ現代の日本の読者が求めるものに合うのではないかと思うからである。また、すでに定着している訳語を安易に変えると不連続ができてしまうのでなるべく変えないように思っているのだが、どうしても変えざるを得ないと判断した訳語もあった。理由はいろいろあるにしても、それについて説明するとどうしても言い訳がましくなるので、ここでは記さないことにする。

2. 『成熟過程と促進的環境—情緒発達理論の研究』について

この本はウニコットにとって二つ目の主要論文集であり、彼が執筆や講演に多くの時間を割いた 60 歳代の円熟期に書かれたものを集めている。「抱えること」をはじめとする彼の主要な概念が明確に打ち出されるとともに、そういった環境論的な観点と並行するようにして「個人の永久の孤立」など外的現実のシャットアウト (Rodman 2003) ともいえる観点が前面に出てくるのもこの時期の特徴と言える。また一方で、後年の「対象の使用」につながるような発想も随所にみられる。

彼の記述には、さまざまなパラドックスが生み出す運動性が含まれていて、これを彼とともに体験することが彼の記述の醍醐味の一つであり、そこに重要な意義があると思う。それは彼の理論についての概説からは得られないので、直接読んでいただくのが一番よいと思う。また、彼の有名な論文については既に多くの紹介もあるので、ここでは、むしろ比較的反り上げられることの少ない章を中心に、ごく一部を引き出して紹介してみたい。

タイトルからすると多くの人には読み飛ばされてしまいそうな第 8 章「道徳と教育」は、意外にも興味深い論文である。これは英語版全集の注釈によれば 1962 年にロンドン大学教育研究所 (当時は実質的に教育系専門職大学院) での輪講形式の公開講演シリーズ「変わりゆく社会における道徳教育」の一つとして行われた講演で、大学院在籍者に限らず教師や教育関係者や研究者をも聞き手としているようである。その点で、この本の第一部に含まれる他の論文がほぼ精神分析家やその周辺を聞き手として書かれているのとは異なり、この論文の前半はとくに幅広い視点から書かれている印象を受ける。

道徳を純粋に外からだけ教えることは有効でないというところから始めて、その子の中に「信じる」という感覚が生まれていることがカギになることを述べ、発達に沿ってこのテーマにかかわる成熟過程と促進的環境を論じている。後半では、ほぼ同時期に書かれた第 6 章「思いやりの能力の発達」と同様に、対象としての母親が破壊から生き残ることの価値が強調され、それを経て、対象としての母親と環境としての母親が統合されるという考えを述べている。

第 10 章「潜在期における児童分析」では、潜在期は欲動の抑圧が強固であるため、幼児期にくらべて分析治療が容易ではない、という共通認識の話から始めて、潜在期の治療における特徴を述べるとともに、クラインとアンナ・フロイトとの対立点の一つであった、治療初期に解釈をするか、それとも準備期間を設けるか、という点に関連して彼の考えを述べている。彼は、子どもの分析素材が解釈すべきことを明らかにする最初の瞬間に解釈することで無意識的協力関係を築く、という点を基本としつつ (このあたりは後年の『子どもの治療相談面接』でも特に強調されている)、子ども自身が意識的・知的理解をもつことの必要性や有用性は、個々の事例によって異なるとしている。また、終結について、潜在期の分析はすっきりしない形で終わることが多いと述べ、思春期が始まる前に終わるか、あるいは思春期に入ってから何年か継続的に行うか、そのどちらかにしたほうが良いとしている。

第 14 章「逆転移」は、彼の有名な論文「逆転移のなかの憎しみ」(1947) から 13 年後に発表されている。ここで彼は、逆転移という用語の意味の拡張が混乱を招いていることを指

摘して、この言葉を本来の狭義の逆転移に限定して使うことを提案しつつも（この点ではジョゼフ・サンドラーらと共通する）、神経症よりも精神病に近い水準の患者において心理療法家や分析家の技法や職業的態度というバリアを突破してくる場合に生じる分析家側の反応を、治療において活用しうるものと捉え、その反応に対しては逆転移とは別の名称を使うことを奨めている。分析家と患者のあいだにあるのは分析家が「自分のところを用いて行う作業」であるという言葉は、まさに現代の精神分析の考え方を示すものと言える。

ときどき引用される第15章「精神分析的治療の目標」では、実にウニコットらしい書き方がされている。ここでいう「目標」は、個々の治療のいわゆる治療目標のことではない。精神分析的な臨床の場面で、彼自身がどうあることを大事にしているかが彼独特の表現で語られる。冒頭に列挙されている三つの目標のうち、二つ目に「健康であること（keeping well）」とある。この英語は、いかにもウニコットが使う言葉の典型ともいえるべき、多義的で一つの日本語に置き換えづらい表現である。これはひっくり返して考えたほうがわかりやすい面があるのかもしれない。つまり、基本的に「健康」であることを志向しつつ、もし治療関係の中で「健康」でいられない瞬間や展開が生じたとすれば、そこで何が起きているのか考えてみるきっかけにならないだろうか、ということでもある。

第16章「クラインの貢献についての個人的見解」は、実に興味深い文章である。これは原注にあるように米国のロサンゼルス分析家候補生に対して行われた講演に基づいている。カリフォルニアでは1950年代からクライン派に関心を持つ分析家たちが少なくなかったといい、この講演から6年後、1968年にビオンが招かれて長期にわたって分析家の指導にあたったことはよく知られている通りである。

この論文では、彼のクラインとの遭遇から、クラインのスーパービジョンでの具体的なエピソードなどを通して、クラインの卓越した点や、彼がいかにクラインに多くを負っているかが語られ、そしてクラインと見解を異にする部分がどこにあるかが平明に述べられている。とくに注目すべき点として、クラインが人間のこころの出発点に妄想分裂ポジションを想定しているのに対して、ウニコットは、さらに以前の時期、つまり、良い・悪いの分割が可能になる以前（いわゆる「抱えることの時期」）に注目し、そこで十分に抱えられなかった場合に生じる混沌（カオス）の状態について述べていることが挙げられよう。この混沌は、崩壊的な不安と結びつくものであることは言うまでもない。

その他、いくつかの章に少しずつ触れるなら、第18章「児童精神医学のための養成訓練」では、児童精神医学が大人の精神医学とは独立した別の領域であり、そのために別のトレーニングが必要であるとして、その理由について詳述しているほか、第19章「性格障害の心理療法」では反社会的傾向に関する彼の理解と、そのさまざまな重篤度に応じたセラピーやマネジメントが論じられている。第20章「こころの病気をもつ人を担当するということ」と第21章「乳幼児期の成熟過程からみた精神医学的障害」の二つでは、ともに精神医学的な障害の治療とマネジメントの全体を視野に入れて、精神病、神経症、うつなどの分析的な理解と臨床を彼のユニークな臨床的視点から説明し、とくに後者の章では、それらと対比しつつ「偽りの自己」などスキゾイド的な特徴をもつ人たちの治療における、依存の時期の意

義に焦点を当てている。

以上、他所では触れられることの少ないであろう章を中心に、ごく一部を拾って述べてきた。個人的に面白いと感じるところに目が行っていて、他所で紹介されることの多いような本筋ともいえる内容は飛ばしている箇所も大いにあると思う。当然ながら彼の本を読む代わりにはならないので、これを読まれた方があらためて彼の本を手にとるきっかけにでもなれば幸いである。

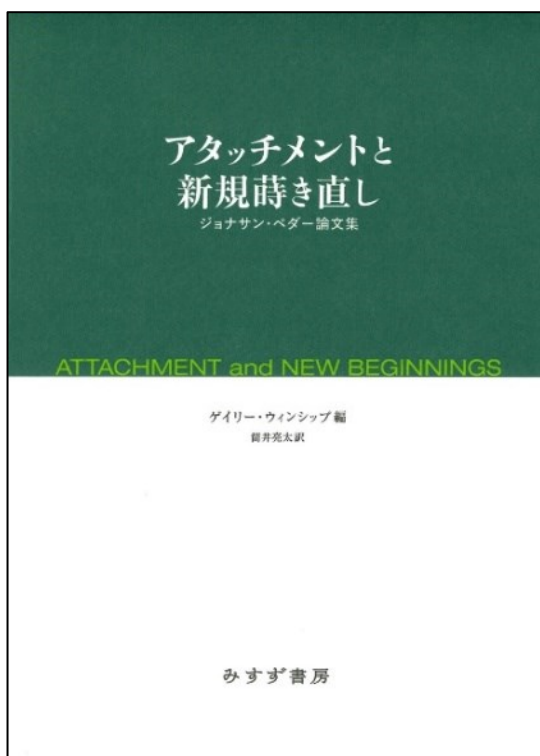
引用文献

Rodman, F. R. (2003). *Winnicott: Life and work*. Da Capo Lifelong Books.

翻訳者に聞く

独立派はウイニコットだけじゃないぞ

立命館大学 筒井 亮太



みすず書房 HP

<https://www.msz.co.jp/book/detail/09630/>

1. 本書との出会いと訳出の動機

私が初めてジョナサン・ペダーの名前を知ったのは大学院生のころだった。告白すると、学生のころの私の性格は捻じ曲がっていた（いまも、そうかもしれないが）。邦訳書を読む際は必ず原書を横に置いて、怪しい訳語や訳文などを見つけては誤訳を発見するという趣味に興じていた。われながら底意地が悪い趣味である。学生時代という膨大なモラトリアム期間をそのようなくだらない事柄に費やしていたかと思うと、後悔してもしきれないのだが、時間は取り戻せないので仕方ない。

そのような悪癖が抜けていないころ、私はグレゴリオ・コーホンによる編著『英国独立学派の精神分析：対象関係論の展開』（岩崎学術出版社）を読んでいた。当然、原書を用意して。すると、邦訳書にはいくつか収録を見送られた論文があることを知った。のちに日本語でも読めるようになるクリストファー・ボラス

やパトリック・ケースメントらの論考に紛れて、ペダーの論文もそこに含まれていた。その興味深い論題「Attachment and new beginning」は記憶に残った。そのため、自然とタイトルが一致する本書『アタッチメントと新規蒔き直し』にも関心を早くから寄せていた。

その後、縁があって、同じくコーホンの編著に収録されている論文を再録しているハロルド・スチュワートの著書（『バリント入門』『精神分析における心的経験と技法問題』ともに金剛出版）を翻訳する機会を得た。以降、ウイニコットの入門書やジョン・ボウルビイの著作物（『アタッチメントと親子関係』金剛出版／『アタッチメントとトラウマ臨床の原点』誠信書房）など、なにかと独立派精神分析の流れを汲む臨床家を意図的に邦訳しつづけてきた。

日本ウイニコット協会の「ニューズレター」に書くのはいささか躊躇われるのだが、私は常々「独立派＝ドナルド・ウイニコット」という単純な結びつきに疑問を抱いてきた。独立派はもっと多様な思索が緩やかに連帯している集まりである。そこにはロナルド・フェアベ

アンもいるし、マリオン・ミルナーもいるし、パール・キングもいる。独立派はウニコット派ではないのである。マーガレット・リトルがどこかで書いていたように、ウニコットをカリスマ化する傾向には警戒しなければならない。

ペダーはウニコットだけではなく（事実、彼は〈ウニコット・トラスト〉代表を務めていたが）、マイケル・バリントやボウルビィからも影響を受けている。独立派はウニコット一強ではない、という思いが私にはずっとあった。ペダーは、前述のシュワートと同じく、バリントの潮流にも属しており、ウニコットにとどまらない独立派全体を日本に紹介したいという私の欲求とマッチした。これが本書を訳出する動機となった。みずず書房は私の無茶な希望に応じてくださった。難解な学術書が売れにくく、口当たりの良い一般書や解説書が売れやすい時代であるにもかかわらず、感謝しかない。

2. 「アタッチメントと新規蒔き直し」についての補遺

本書の簡単な概略は、同書に収められているジェレミー・ホームズやゲイリー・ウィンシップらによる解説を読めば十分である。ここでは同書で描かれていなかった側面を取り上げたい。

さて、第2章として収録され、本書のタイトルにもなっている論文「Attachment and new beginning」は、先に述べたように『英国独立学派の精神分析』の原書にも収められている。その際、ペダーによる補遺が合わせて記されている。今回の『アタッチメントと新規蒔き直し』には未収録であったため、まずはそれを紹介しておこう。

よく言われていることなのだが、精神分析の訓練を受けた後の数年間、その回復や療養の期間が必要となる。訓練が過剰に理想化されないためには、ことによるとこの期間が必要なのだろう。分析家であれば誰もが自分自身の考え方というものを発見する必要がある。私自身、この成長の段階である患者の問題に出くわした。この患者は抑鬱的であったが、ほどなく退行的になり、私の手を握るなど、なんらかの身体接触を求める人であった。私はこれが助けになるようには思えないと直観した。もちろん、これは私の内的な上司自我 supervisor-ego の見解とも一致していた。ところが、これを単なるドグマとして受け入れたくはなかったため、私は自分なりに自分で考えたことを発見しようとした。それに際して、良性退行と悪性退行に関するマイケル・バリントの著作が大きく助けになることがわかった。その当時、私はジョン・ボウルビィのアタッチメント理論をめぐる著述物にも関心を寄せていた。アタッチメントと喪失に関する最初の2冊（1969年、1973年）が出版されており、古典的なリビドー理論ではない枠組みで、このような患者たちのニーズを捉える新しい方法の萌芽が示唆されていた。

しばらくすると、また別の患者がやってきた。その患者のニーズがもっと良性退行の領域にあればいいのに、と私は願った。幸いにして、それは事実であると判明し、新しい始まり new beginning につながった。本論〔第2章「アタッチメントと新規蒔き直し」〕では、その女性患者の事例と、私がなんとか解決しようとしていた理論的問題について記している。使用された技法は、〔現在の〕私の治療レパトリーの標準要素とはなっ

ておらず、それ以降、同じような手法で事例を取り扱ったこともない。ことによると、私は現在、もっと解釈というあり方に頼っているのだろう。しかしながら、時として正統派の分析が示唆する以上に、分析ではたしかに奇妙なことが起こる。大半の分析家は、時にはそのような問題に向き合わなければならない。ところが、こうした課題は、非公式に議論されることはあっても、実際に書き記されることがほとんどない。私は思う。私たちは驚きに開かれておくように絶えず覚悟すべきだし、不測の事態に振り回されすぎないように希望を抱えつつ用意しておくべきだ、と。(pp.295-6)

ペダーはこの「アタッチメントと新規蒔き直し」という論考で、女性患者との身体接触について論じている。分析実践における身体接触といえば、ウイニコット、バリント、ハインツ・コフト、ケースメント、スチュワートなどが私の頭にパッと浮かんでくる。通常、分析に限らず、心理療法の作業において身体接触は禁忌とされる。いわゆる「境界侵犯」の問題だ。ペダーはこの問題を自分なりに考えた。教えられてきた訓戒や教義をそのまま実行するという愚を犯さなかった。身体接触を求める患者の要請を受けるか否か——ペダーの葛藤は、あるいはその思考のプロセスは、あるいはその逡巡と決断の軌道は、同論文に克明に綴られているため、是非とも一読していただきたい。

さて、私に境界侵犯を肯定する意図はない。重要なのは、この論考を書き終えた後、補遺に書いてあるように、ペダーはこの問題を考えつづけ、自分のやり方や考え方を修正しつづけたという点である。たとえば、ケースメントが「B夫人」の事例に何度も思いを巡らせているように、ペダーも自分の分析臨床を固定化しない。この流転しつづける思索の流れが独立派を大きく特徴づける要素であると思う。

私たちが訓練や学習の過程で知る理論はどこまで行っても仮説に過ぎない。目の前の患者やクライアントに適合するのかどうか——私たちが驚く覚悟をもって、不測の事態に振り回される準備をして——検証されることを待っている仮説なのである。検証することなく盲目的に適応される理論は仮説ではなくドグマである。臨床はドグマで実践できるほど甘くはない。独立派の分析家たちの著作物にはこの点がさまざまな視点や角度から描かれている。やはりジョナサン・ペダーは独立派の系譜に位置する人物であると思う。

3. 「新規蒔き直し」という訳語に関する若干のコメント

最後に、本書のタイトルにも含まれているテクニカル・タームについてコメントしたいと思う。バリントの用語として知られている new beginning は、中井久夫による訳出以来、「新規蒔き直し」と表記されてきた。ところが浩瀚な『精神分析事典』（岩崎学術出版社）を紐解いてみてもその単語が独立して取り上げられてはいないことに気づく。バリントの理論と実践を端的に示す概念にもかかわらず、である。

結論から述べると「新規蒔き直し」は誤訳である。そう言わざるをえない。すぐに「をえない」と補足してしまう私がいる。誤訳であるにもかかわらず断言しきれない私がいる。これまで「新規蒔き直し」を別の訳語で置き換えるチャンスが何度もあった。懺悔する。誤訳

ではないかと思っながら、私はこの訳語を修正できなかつた。中井久夫に対する敬意の念が邪魔をした。このペダーの訳書においてさえ、私は手を入れることができなかつた。誰かに対する敬愛の想いがこれほどに強大であるとは思ってもみなかつた。「もう専門用語として定着してしまっているから」と私は自分に言い聞かせて訳出を進めていた。これはとてつもなく苦しいことだつた。この文章を書いている現在でも、訳語を取り消したくなっている私がいるし、すでに諦念している私もいる。

「新規蒔き直し」を辞書で引いてみると、本来の意味は「もとに戻って、もう一度新しくやりなおすこと」とある。バリントのいう new beginning は（良性）退行の果てに生じる前進のプロセスである。「新規蒔き直し」という表現にはこの退行の意味合いがすでに含意されてしまっており、概念上の区分が曖昧にされてしまう危険がある。そもそも、new beginning は平易な表現である。たとえば、make a new beginning で「新しいスタートを切る」という意味になる。日本語訳の「新規蒔き直し」では日常用語として不適格となろう。「新たな始まり」が順当な訳語ではないだろうか。

どのディシプリンでも、定期的に訳語の見直しが実施されている。故・小此木啓吾による訳語「徹底操作 working through」が「ワーキング・スルー」とカタカナ表記されるようになったのもここ十数年の話ではなかつたか。専門用語の邦訳には訳者の思いや考え（あやまちを含め）が込められている。当然のように流通している訳語や用語に疑いの目を向けるのはなかなか骨が折れることだ。けれども、そうした先達の遺産を引き継ぎつつ、私たちは適正な訳語を探し求めるプロセスを弛まず推し進めてゆかなければならない。私も次こそは、「新しいスタートを切る」ことができれば、と気持ちを新たにしているところだ。

以上、本書『アタッチメントと新規蒔き直し』を訳出した動機、同書のハイライト、訳語へのコメントをもって、書籍紹介の稿を閉じたい。願わくは、日本ウニコット協会に所属している臨床家の多くが、ウニコット「以外にも」目を向けてみるきっかけになれば良いと思う。すでにバリントやボウルビィなどの著作に親しんでいる人たちも、同書を紐解き自分なりの思索を練り上げてもらえるならば、訳者としてこれ以上の喜びはない。

文献

Kohon, G. (Ed.: 1986) *The British School of Psychoanalysis: The Independent Tradition*. Yale University Press.

「ウニコット研究」投稿募集

「ウニコット研究」投稿募集

当会では、日本ウニコット協会雑誌「ウニコット研究」を発刊いたします。投稿論文の募集も開始いたしますので、下記の投稿規定をご参照ください。なお、投稿規定は協会HPにも掲載しております。会員の先生方からの積極的な投稿をお待ちしております。

日本ウィニコット協会「ウィニコット研究」投稿規定

1. 投稿資格

投稿は原則として、日本ウィニコット協会正会員、顧問に限る。

2. 投稿条件

論文内容は未刊行のものに限る。

3. 採否

論文の採否、掲載順などは編集委員会が決定する。

4. カテゴリー

投稿する論文のカテゴリーは以下の通りである。

論考：ウィニコットや独立学派精神分析の実践や芸術、その関連領域における、理論、概念、歴史や文化的背景などについての著者独自の見解を提起する論考。12,000字以内を目安とする。

総説：特定の主題についての学問的動向を遠望し、筆者独自の論考を示した論文。12,000から28,000字以内を目安とする。

原著：個人・集団の心理療法や心理検査による臨床研究、観察研究、質的研究、実証研究、また文化や芸術領域等における論考であり、独立学派精神分析とその関連領域についての著者独自の主張が提起されている論考。12,000字以内を目安とする。

著者は投稿の際、掲載を希望するカテゴリーを表題の前に明記すること。

5. 図表

図表、写真などは図1・表1と順序を付け、それぞれに和文で題をつける。文字数の制限に図表は含まない。

6. 原稿の作成

原稿はワードプロセッサを用いて作成する。A4用紙に横書き、40字×40行を目安に原稿を作成すること。

7. 外国語の表記

人名、地名等の固有名詞は原則として原語を用いる。

(例：Winnicott, D, W / Freud, S / London)

8. 引用

文献の主著者のアルファベット順に番号を付し、本文中にその番号を適当な個所に付す。肩付きで (1) (2) のように記載する。本文の末尾に「文献」という表題にて文献リストを付し、文献を番号順に記載する。各文献は、雑誌に掲載された文献については、著者名、発行年、題名、誌名、巻、ページの順、単行本の場合は、著者名、発行年、書名、出版社名、発行地の順に掲載する。

(例)

(1) 妙木浩之 (2021) : Laplanche の「謎のメッセージ」. 精神分析研究 65 (4) , 369-375

(2) Bollas, C. (1979) : The Transformational Object. International Journal of Psychoanalysis 60, 97-107

(3) Patrick Mahony. (1987) : Freud as a Writer. Yale University Press. 北山修監訳 (1996) : フロイトの書き方. 誠信書房, 東京

(4) Winnicott, D. W. (1968) : The use of an object and relating through cross identification. In Winnicott, D. W. (1971) : Playing and Reality. Basic Books, New York. 橋本雅雄訳(1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 東京

9. 表題等

表題、著者名、著者所属、5語以内のキーワードをつける。

10. 要約

原著については、本文はじめに 800 字程度の邦文要旨を付す。

11. プライバシー

クライアントのプライバシーに十分配慮せねばならない。臨床研究においては、その情報は修飾することとし、経過の詳細等よりも主張の独自性を重視する。

12. 投稿の方法

投稿の際は、論文の電子データを（原則として Microsoft の Word 形式）を電子メールの添付ファイルとして、日本ウイニコット協会事務局（jwasecretariat@gmail.com）宛てに送信する。

協会からのお知らせ

研修会・協会共催事業のご案内について

日本ウニコット協会では、ウニコットおよび独立学派に関する研修会や、協会共催事業を会員の皆さま宛てにご案内させていただいています。

つきましては、会員の先生方が主催されている研修会などで、会員の皆さまにご案内したい内容がございましたら、協会事務局宛てにメール【jwasecretariat@gmail.com】にてご連絡ください。理事会にて審議の上、承認された場合、協会ホームページの「研修会情報」への掲載と、メーリングリストでの配信をさせていただきます。

なお、メールの件名を「研修会（協会共催事業）掲載希望」とし、本文に研修会の詳細をご記入ください。フライヤーの画像データやPDFなどがあれば、そちらも添付していただければ掲載いたします。

協会からのお知らせ

2023 年度分年会費納入のお願い

2023 年度（2023 年 4 月～2024 年 3 月）の日本ウニコット協会の年会費の納入についてご案内いたします。納入会費は下記のとおりですので、まだお振込みでない方は、下記口座に 2023 年 10 月 31 日までに振込をお願いいたします。

記

○年会費：5,000 円

○納入方法：銀行振込（送金手数料は自己負担でお願いします）

振込先：りそな銀行上六支店

口座番号：普通口座 0370321

口座名義：日本ウニコット協会

*必ずお名前をご明記ください。

*職場名義での振込み等される方は、ご一報くださるようお願いいたします。

ご不明な点がございましたら、協会事務局までご連絡ください。

編集後記

エアコンをきかせた部屋で原稿を受け取って、まだ夏気分でしたら、もう9月も終わりでした。そういえば、朝夕は少し涼しくなりましたね。暑いとそれだけで体力が奪われてしまって、ぐったりしている間にもう秋です。衣替えを兼ねて少しばかり断捨離しようと手をつけはじめたのはいいものの、いつも本だけは捨てられず。翻訳者の先生方からのご本の紹介を拝読してしまったがために、私の積読タワーがまた高くなりそうです。頭の中に入れてしまいたいものです。

ウィニコット・フォーラム 2023 の申し込みがはじまっています。みなさまふるってご参加くださいませ。

(奥田 久紗子)

2023年9月23日発行

日本ウィニコット協会 Newsletter vol.11

編集：石田 拓也

奥田 久紗子

発行：日本ウィニコット協会

日本ウィニコット協会事務局

e-mail：jwasecretariat@gmail.com

HP：https://winnicottforum.com

〒543-0001

大阪府大阪市天王寺区上本町6丁目6-26 上六光陽ビル601

たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内
